

琉球大学学術リポジトリ

妊娠期推奨体重増加量区別にみた妊婦の生理的特性および栄養素摂取量と正期産児の出生体重との関連

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Tamashiro, Yoko, 玉城, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42206

(様式第 5 - 2 号)

平成 30 年 6 月 21 日

琉球大学大学院
保健学研究科後期課程委員会 殿

論文審査委員

主査 氏 名 古謝 安子

副査 氏 名 金城 貴夫

副査 氏 名 國吉 緑



学位（博士）論文審査及び最終試験の終了報告書

学位（博士）の申請に対し、学位論文の審査及び最終試験を終了したので、下記のとおり報告
します。

記

申請者	専攻名 保健学	氏名 玉城 陽子	学籍番号	■■■■■■		
指導教員名	與古田 孝夫					
成績評価	学位論文	<input checked="" type="checkbox"/> 合格	不合格	最終試験	<input checked="" type="checkbox"/> 合格	不合格
論文題目	Physiological and nutritional intake characteristics of pregnant women according to their recommended gestational weight gain in relation to the birth weight of their full-term infants (妊娠期推奨体重増加量区別にみた妊婦の生理的特性および栄養素摂取量と正期産児の出生体重との関連)					
審査要旨	<p>本論文の目的は、妊婦の推奨体重増加量区別に、妊娠中期（24～28 週）・末期（34～37 週）の食事摂取量と正期産児の出生体重との関連を明らかにすることである。その際の食事摂取量は、妥当性と信頼性が確認された簡易型自記式食事質問紙法（Brief-type Self-administered diet History Questionnaire、以下 BDHQ とする）による栄養素等摂取状況の解析を用いている。</p> <p>本論文で使用された研究方法は、非妊時の体格を踏まえた中期と末期における生理的特性及び BDHQ 調査、出生児体重等による縦断的観察研究である。沖縄県内の 3 病院（南部、中部、北部）と</p>					

(次頁へ続く)

1 診療所（南部）に通院する妊婦（n=477）を対象に、妊婦健診時の体重、血圧、一般血液検査及び BDHQ 調査を実施し、記入不備や肥満妊婦等を除いた 303 名を解析対象とした。統計的解析は、妊婦の体重増加量を体格区分と推奨体重増加を加味して 3 群に、児の出生体重は在胎期間別体格基準値で 4 群に分け、項目別分析を経て、共分散分析を行い、ボンフェローニ法で多重比較を行った。

妊娠期推奨体重増加量区分別の栄養素摂取量と児出生体重各群との関連において、妊娠中期のエネルギー産生比率における炭水化物エネルギー比率は、体重増加量「過少群」では出生体重 10-50 パーセントイル（以下 P）以下群が 50-90P 群より有意に低く、「適切群」では 10P 以下群が有意に高かった。一方、たんぱく質と脂質エネルギー比率は、「過少群」で 10-50P 群の方が 50-90P 群より有意に高かった。妊娠末期では有意な差はみられなかった。

本論文により、妊娠中期で妊婦の体重増加量が少ない場合は、主食を増やし炭水化物からのエネルギー摂取を増加させると胎児の成長に繋がり、妊婦の体重増加が推奨どおりであれば炭水化物からのエネルギー摂取過多は在胎不当（Small-for-Gestational-Age、SGA）児の出生に関連する可能性が示唆された。本論文により、胎児の成長には他の栄養素はもとより主食からの適切なエネルギー摂取が重要であることが確認されたが、体重増加「過少群」の 10P 以下群や 10-50P 群における BDHQ を詳細に検証することによって、今後、妊婦健診の現場における臨床応用が期待できる。

本論文は、妊婦の栄養素に関する海外での血清濃度の研究を踏まえた上で、妊娠期の体重増加量区分別の食事摂取による栄養素摂取量と児の出生体重との関連を確認していることから、新規性が認められる。さらに、妊娠中期のエネルギー産生比率における炭水化物とたんぱく質及び脂質エネルギー比率の出生体重との関連は、体重管理に重きを置く妊婦指導を改善し、助産学や看護学教育における適用可能性を示唆していることから、当該分野における貢献度も高いと思われる。また、申請者は審査会における質疑に十分に対応しており、最終試験においても博士としての保健学に対する素養を有していることが確認された。

以上のことより、本審査会では玉城陽子氏の学位論文及び最終試験を合格とする。